



マリー・ダグー伯爵夫人の生涯と作品：  
小説『ネリダ』における事実とフィクション

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂本, 千代 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004905">https://doi.org/10.24729/00004905</a>

## 論文

マリー・ダグー伯爵夫人の生涯と作品  
—小説『ネリダ』における事実とフィクション—

坂本 千代

## はじめに

マリー・ダグー伯爵夫人は音楽家フランツ・リストの恋人として知られているが、ダニエル・ステルンというペンネームのもとに『1848年革命史』を始め数多くの著作を残した文筆家でもあった。本稿ではまず、フランス・ロマン主義時代とそれに続く時期の有名人であったこの女性の半生を、特にリストとの関わりに注目しながらたどる。そのあと彼との恋を下敷きにした長編小説『ネリダ』をとりあげ、不評を買ったこの小説中の事実とフィクションのからみあいを検討し、主人公ふたりにどの程度彼女とリストの姿が描き込まれているのか、当時大きな議論を巻き起こしていたサン・シモン主義者たちやフェリシテ・ド・ラムネなどの思想がこの作品がどのように反映しているか、また彼女の生涯においてこの作品はどのような意味を持っていたのかについて考えたい。



図版1 マリー・ダグー（レーマン作）

## 1 ダニエル・ステルンの誕生まで

まずは、後年書かれたマリーの回想録や、後に出版された書簡集などにもとづいて、彼女に関する伝記的事実をたどることとする<sup>2)</sup>。マリー・ド・フラヴィニー、のちのマリー・ダグー伯爵夫人は1805年12月31日にドイツのフランクフルトで生まれた。父親であるフラヴィニー子爵はフランス人の亡命貴族で軍人であり、母親はフランクフルトの銀行家で大金持ちのベトマン家の娘であった。

1815年にナポレオン帝政が終わり、復古王政が始まるとフラヴィニー一族はフランスに戻った。利発で美しい少女となっていたマリーは、ドイツ人家庭教師からかなり広範囲の教育をほどこされ、また、ダンスやフェンシングのレッスンを受け、当時人気のあったゴージェ神父という人物の学校に週1回通って、フランス語、ラテン語、歴史、地理、初等数学などを学んだ。また、音楽の素養のある母親からピアノ、ソルフェージュ、和声法の手ほどきを受け、後には優秀な音楽教師のレッスンを受けた。少女時代のマリーは音楽を愛し、深く理解し、いくらか作曲を試みるまでになっていたようである。

1821年15歳の時に、当時の上流階級の娘たちの寄宿学校として有名であったサクレ・クール（聖心）修道院の寄宿生となる。幼い頃から英才教育を受けていたマリーにとって、サクレ・クール修道院で与えられる教育内容はかなり貧弱なものであったにもかかわらず、彼女は優等生として楽しく過ごしたようであり、この時期の体験は後の回想録に詳しく書かれ、小説『ネリダ』にも取り入れられることとなる。だが、翌年夏には屋敷に呼び戻される。彼女は社交界にデビューし、家族による花婿さがしが本格的となる。美貌、財産、家柄と三拍子そろったマリーへの縁談はたくさんあったが、最終的には家族のすすめる最良の花婿、古い名門貴族出身で15歳年上のシャルル・ダグー伯爵と結婚した。

ダグー伯爵夫人となった彼女は、自分のサロンを開き、そこにはロマン派の詩人ヴィニー、作家で批評家のサント・ブーヴ、流行作家ウージェーヌ・シューといった人々が頻繁に通ってくるようになる。サロンでは寸劇

や文学作品の朗読が行われ、コンサートも催された。ピアノに編曲されたベルリオーズの『幻想交響曲』が演奏され、フレデリック・ショパンが彼のマズルカを弾いた。また、当時フランスであまり知られていなかったシューベルトの歌曲も披露された。こうして、彼女のサロンはパリで最もすばらしい集まりのひとつであると考えられるようになっていった。

ダグー伯爵夫妻には娘がふたり生まれたものの、夫婦間の性格や好みの違いが顕著になっていった。七月革命で復古王政から七月王政に体制が変わって間もない1832年の終わり近く、とある夜会でマリーは天才音楽家フランツ・リストと運命の出会いをする。彼は21歳、マリーは27歳になろうとしていた。ふたりは意気投合し、フランツはその後頻繁に彼女の屋敷を訪れることになる。マリーの音楽好きは誰もが知っていることなので、フランツの訪問を不思議に思う者はいなかった。その上、結婚して6年たつ彼女は今や誰にも気兼ねせず、気に入った人を招待することができたのである。

宗教的なものに強くひかれるフランツは、新興宗教じみたサン・シモン主義者たちの集会に顔を出し、また、その過激な社会思想ゆえにローマ教会から破門された司祭ラムネに夢中になって、彼の思想の熱心な信奉者となっていた。宗教においても政治においてもフランツは凡庸さを嫌い、あえて極端な側につく傾向があった。彼は当時のブルジョワ的王政や中道政策を軽蔑し、共和制を夢みていた。文学においては、バイロンの詩の主人公たちやゲーテのウェルテルのようなロマン派のヒーローを愛していた。彼はこのような自分の意見や理想を熱っぽくマリーに語った。ふたりはお互いの恋心確かめあって恋人同士となる。やがて彼女は妊娠していることに気づき、ふたりはパリを離れる覚悟を決める。

彼らがその計画をいよいよ実行に移そうとしていたある日のこと、マリーは突然ラムネの訪問を受けた。若いフランツを可愛がり気遣っていたラムネは彼の口から駆け落ちの計画を聞き出し、マリーにそれを思いとどまるよう説得しようとやってきたのである。ラムネの書物を読み、またフランツからしばしば彼のことを聞かされていたマリーは彼をたいへん尊敬していたが、実際に会うのは初めてだった。彼は最初のうちこそためらって

いたが、やがて真心のこもった熱弁をふるってマリーにフランツを連れ去らないでくれと懇願した。彼女はラムネの説得に心を動かされたものの、出発への決心は揺るがなかった。1835年5月マリーはパリを出発し、6月にスイスのバーゼルでフランツと落ち合った。その年の12月に彼女は女の子を出産した。赤ん坊はブランディーヌと名付けられ、田舎の乳母に預けられた。

恋人たちはジュネーヴに滞在し、フランツはそこで音楽活動を再開した。マリーにとって、この滞在は愛情生活のみならず別な方面でも重要な時期となった。それまで彼女はおりにふれて文章を書いて親しい人たちに読み聞かせてきたのだが、ジュネーヴの学識ある友人たちが彼女の書いたものをほめ、ぜひそれらを出版するようにとすすめたのである。文筆家になること、それはマリー自身がずっと以前から心に秘めてきた野心であった。こうして彼女は雑誌にちょっとした記事を寄稿したり、フランツの名前で『ガゼット・ミュージカル』誌に発表するいくつかの記事を執筆した。フランツがアイデアを出し、マリーがそれを文章にしたのだ。フランツの友人であったジョルジュ・サンドとその家族がふたりに会いにきて一緒にシャモニーを旅行したこともあった<sup>3)</sup>。

1836年10月になるとふたりはフランスに帰国する。将来のことを見据えて、夫ダグー伯爵や実家の家族と話し合う必要があったからである。ふたりはパリに腰を落ち着けた。サンドと同じホテルに滞在し、客間を共同にしたのはこの頃のことである。マリーとフランツはベリー地方のサンドのノアンの館を訪ねて滞在したりもしているが、この頃にはサンドとマリーの友情はいささか冷却していた。また、フランツとマリーの間にも猜疑心や嫉妬が入りこむようになってきていた。この状況を打破し、もう一度新鮮な情熱を取り戻すため、そしてピアニストとしてのフランツの経済的理由もあって、ふたりは1837年7月にイタリアをめざして旅立った。

マリーとフランツはまもなくフランス第2の都市リヨンに到着した。それは労働者たちの町であり、当時の彼らの貧しい生活、飢え、そこに生じた社会主義運動によって騒然としていた。フランツの影響のもと、マリーもサン・シモン主義者の思想になじんでいたが、この時期には特に彼らの

代表アンファンタンや同じくサン・シモンの弟子であった社会思想家ピエール・ルルーの主張に興味を持ったようである。ルルーはサンドの師でもあり、芸術家、学者、労働者が協力して作る理想の共和国の建設を夢みていた。

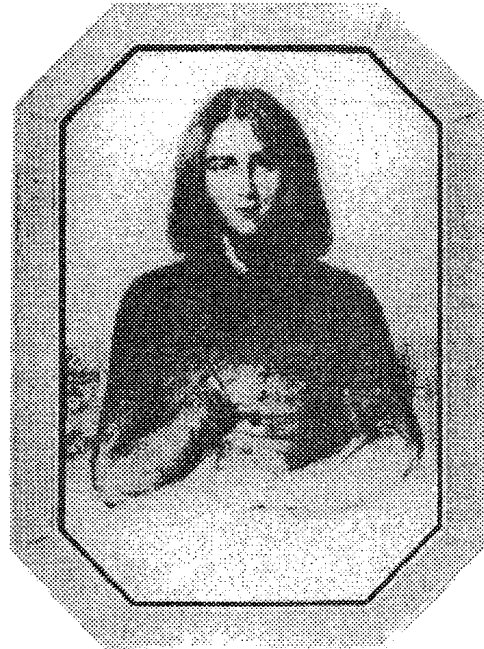
1837年北イタリアのコモ湖畔で彼らのふたり目の娘コジマ<sup>4)</sup>が誕生した。翌年、マリーとフランツはミラノへ、そしてヴェネツィアへと旅を続ける。だが、ヴェネツィアの空気はマリーには合わなかった。彼女は体調を崩し気分が沈みがちになってくる。いっぽうフランツのコンサートのほうは常に大きな成功をおさめていた。彼の華やかな成功もマリーの憂鬱を癒すことはできない。時とともにふたりの関係は変質しつつあった。少なくともフランツの心の中では、暗い顔をしたマリーからしばらく離れていたいという欲求が日増しに大きくなっていったようである。何かのきっかけでそれが表面化するのには時間の問題であった。まさにその時ハンガリーを大洪水がおそったのである。このニュースを知ったフランツは祖国の人々を援助するための慈善コンサートをするため、マリーをヴェネツィアに残してウィーンへと旅立った。ウィーンでのフランツの成功と興奮、ヴェネツィアでのマリーの病気と猜疑心は、ふたりの間に取り返しのつかぬ亀裂を生じさせてしまうことになった。

その後ヴェネツィアに戻ったフランツとともに旅は続き、1839年5月には彼らの息子、ダニエルがローマで誕生する。だが、ふたりの関係は悪化の一途をたどっていた。その年の10月、娘ふたりを連れたマリーはパリに、フランツはウィーンへと別々に出発していく。末子ダニエルはイタリアの乳母のもとに残された。

パリでのマリーは自分の生活に新たな目標を見つける必要があった。そんな時、出会ったのが旧友デルフィーヌ・ド・ジラルダンの夫である新聞王エミール・ド・ジラルダンだった。彼の後ろ盾のもとに彼女はジャーナリストとしてデビューする。その時ペンネームとして選んだのがダニエル・ステルンという男性名である。

さて、パリに落ち着いたマリーと演奏旅行でヨーロッパ中を駆け巡るフランツの関係はその後数年間続いた。ふたりの間でかわされた多くの手紙

は、少なくとも言葉だけを見る限り、やさしく熱烈で愛情にみちている。だが、恋愛の自由を手にしたフランツの浮き名はしばしば彼女の耳にまで届くようになった。マリーはフランツ・リストの愛人であることはともかく、「愛人のひとり」になることには耐えられなくなっていた。1844年4月にパリにやってきたフランツとの間で激しいやりとりがあり、決定的な破局が訪れた。しかし、3人の子どもの親である彼らの交渉が途絶えたわけではなく、その後もふたりの文通は続けられたのであった。



図版2 フランツ・リスト（メリエンヌ作）

## 2 モデル小説『ネリダ』

### 2.1 ロマン主義的天才の肖像

マリーはダニエル・ステルンの名で『ルヴュ・アンデパンダント』誌に1846年1月から3月まで小説『ネリダ』を連載し、そのあと単行本として出版した。ネリダ (Nélida) はヒロインの名で、これはダニエル (Daniel) という名前を構成するアルファベットを組み替えたものである。主人公ネリダの性格と運命に自身のそれを投影しようとする作者の意図もあったで

あろう<sup>5)</sup>。

この小説が発表された時、批評家たちの態度は冷淡だった。マリーの崇拜者である文芸批評家サント・ブーヴでさえ、彼女の期待に反し沈黙したままであった。読者たちはもちろんネリダにマリーを、不実な恋人ゲルマンにフランツを重ね合わせ、彼らの性格や欠点、恋愛事件のいきさつとその破局の原因をそこから読み取ろうとした。バルザックの『ベアトリクス』<sup>6)</sup>やサンドの『ルクレツィア・フロリアニ』<sup>7)</sup>と『ネリダ』を比較し、マリーのこの小説は前二者よりも劣っているとする人々もいたようだ。

このようにモデル問題で人々の好奇心をそそった『ネリダ』であるが、この作品のどこまでが真実あるいは事実で、どこからがフィクションなのだろうか。主人公ネリダとゲルマンはどの程度までマリーとフランツに重なるのだろうか。創作にさいして、作者が意識的に事実を変更・修正した点からはどのようなことがわかるだろうか。

ゲルマンとフランツの一番大きな違いは、もちろんその職業である。フランツが音楽家であるのに対して、ゲルマンは画家、この点ひとつをとりあげても、この人物を単純にフランツと同一化することはできない。また、作者にとっても、これを単なる内幕暴露小説ではなく、ひとつの独立した文学作品とするためにどうしても必要な変更であったのだろう。だが、この小説中でゲルマンを指すとき、画家 (peintre) という言葉はほとんど出てこず、芸術家 (artiste) という語が使われており、これはもちろん画家だけでなく、音楽家をも含む名称である。そしてこの芸術家 (artiste) と対照的な位置にある、あるいはそれより下に位置するものとして職人 (artisan) という語がしばしば出てくることになる。ネリダと再会したゲルマンは、幼なじみの彼女と別れてからの自分の境遇を次のように言っている。

芸術家になること、それはぼくの天職でした。でも職人 (artisan) のままでいなければなりませんでした。なぜならそれがぼくの不安定な生活を支える条件だったからです<sup>8)</sup>。



このようにゲルマンを指すとき、画家ではなく芸術家という語が使われることによって、小説中のこの人物とフランツのイメージが否応なく重なることになる。やがてネリダはゲルマンに深く恋するようになり、彼女の目には彼はまさに光り輝く偉大な天才そのものとして映る。だが、物語の語り手は、ゲルマンを次のように評している。

ゲルマンには類いまれな能力があった。彼には、天才と誤認されるほど、あらゆるものが揃っているように見えた。鋭い知覚、人に伝染するような熱狂、言葉と絵筆の中に魔法のようにあふれる炎、堅い意志、不屈の自尊心、あらゆる形態の美にたいする渴望。[……] しかし彼は膨張する能力しか持っていなかった。哲学者や偉大な人物や本物の芸術家の持つ集中する能力が彼には欠けていたのだった。(129)

この引用の後半部分はともかく、前半部分は「絵筆」を「ピアノ」に置き換えるとそのままフランツの姿を映し出したものと言える。そして、この後半部分で出た批判、つまり際限なく膨張していった、思想や趣味が無秩序に陥る傾向、これも少なくとも若き日のフランツにいくらか当てはまるものであった。その点を少し見てみよう。

若い頃の彼がむさぼるように読書し、その当時のさまざまな哲学者、社会思想家などの影響を受けたことはリストの伝記やマリーの回想録にも記されているが、これはそのままゲルマンの姿として小説中に書き込まれている。

特にゲルマンはしっかりした教育によって精神が準備されておらず、また危険をさけるよう警告してくれるような影響力を持つ人もいなかったもので、真偽ごたまぜの、あるいは合理的な、あるいは気違いじみた思想の奔流に大喜びで身を投じた。これらの思想は当時の社会のあちこちに氾濫していたのである。いきあたりばったりでごたまぜに、手当たり次第彼は読み、聞き、受け入れた。すべてが彼の無秩序な傾向に沿うものだったからである。(76-77)

そして、これらの当時おおいに流布した思想の一つがサン・シモン主義者たちのそれであったのである。ロマン派の芸術家たちへの彼らの影響は非常に大きなものがあり、フランツ、マリー、そしてサンドらも例外ではなかった。

サン・シモン主義の教義のキーワードに「有機的時代」(époque Organique)と「批判的時代」(époque Critique)がある。偉大な宗教思想が生み出され組織化される時代と、それが危機を迎え解体していく時代である。彼らによれば、15世紀末以来「批判的時代」が続いており、今こそ古いキリスト教に代わる、新しい時代の新しい宗教を世に知らしめ広めるべき時なのである。1830年に出版されたサン・シモン主義の教義の書『芸術家へ』を見てみよう。

芸術は有機的時代にしか花開くことができず、靈感は社会的で宗教的である時にしか力強く、役にたつものとはならない。来るべき有機的時代の新しい全体的な教義を人々に受け入れさせるために、サン・シモンの弟子たちは献身的に活動している。彼の思想に従って人類の未来を決めるために我々は努力するだろう。今日芸術家たちは人類をこのような未来に導くべく尽力しなくてはならない。そうすることによってのみ、現在芸術家たちが陥っている従属的役割から身をおこし、社会のあとに付き従うのではなく、その先頭に立って進み、彼らの高貴な使命を果たすことになるであろう<sup>9)</sup>。

このように、来るべき新しい宗教の時代のために、人類を導いていく芸術家というイメージはロマン主義時代の若い芸術家たちの自尊心をくすぐり、大きな共感を持って迎えられたのは言うまでもない。『ネリダ』のゲルマンはこの点においてもフランツと重ねあわされている。

彼はサン・シモン主義の熱狂的な賛同者となっていた。芸術活動以外の時間はすべて説教を聞いたり、新しい福音の教義を理解するために使っていた。(76)

食事の間、使用人たちがいるので、[ネリダとゲルマンの] 会話は一般的な問題に

関するものとなるのだった。しばしば、話題に芸術がとりあげられた。また、時々には社会改革家たちの近著やサン・シモン主義者たちやフーリエ主義者たち、また当時「人道主義的」と呼ばれていた思想の発展について彼は語ったのだが、論理的というよりは感激しやすいゲルマンの精神において、それらは奇妙な混乱を引き起こしていた。(127)

さて、もう一度サン・シモン主義者たちの『芸術家へ』に立ち戻ろう。彼らはこの書物を次のような呼びかけで締めくくっている。

このような未来へと人類を連れて行くために連帯しよう。ひとつの豎琴で調和する弦のように結びつきあって、後世の人々によって繰りかえされるであろうこの聖なる讃歌を今日から歌い始めよう。今後、芸術は信仰となり、芸術家はその司祭となるのだ<sup>10)</sup>。

「芸術家は司祭」、これこそフランツを熱狂させた言葉であり、それはまたずっと後に彼がカトリックの聖職者となる運命を予言するものであった。『ネリダ』を読んでみよう。

ゲルマンは大喜びでネリダに芸術の神秘や社会理論の初歩を教えた。[……] ゲルマンは自分の芸術について、信仰者の神秘的な言語を用いて語るのだった。彼によれば、美は神であり、芸術は信仰、芸術家はその司祭なのだ。(77-78)

このように、小説中では語り手によってゲルマンにたいするサン・シモン主義の影響が辛辣な皮肉を交えた口調で語られている。ところで、マリーと出会った頃のフランツが傾倒していたのはサン・シモン主義だけではなく、それよりもっと大きくて長続きする影響を彼に与えた人物がいた。ラムネである。このブルターニュの聖者とマリーは、フランツと彼女の破局後も交際を続けていた。『ネリダ』において、ラムネの影はサン・シモン主義者たちよりもっと複雑な形で現れることになるが、それは後に検討することにしたい。

さて、ゲルマンの中にあるフランツのイメージを決定づけるのは、何よりも彼の苦悩と憤りの言葉である。庶民階級に属する画家ゲルマンはネリダに向かって次のように言う。

ぼくたちは賤民なんです。[……] それはわかっています。社交界の人々はぼくたちをたいそう見下して下賤な職人のように扱っています。[……] 彼らは、ぼくらの最高の野心は退屈しきったお殿様からお褒めの言葉をいただくことや、神経質な女性の不安を紛らわせることであるはずだと信じているんです。(75)

これはマリーと出会う前からのフランツの憤りであった。マリーは回想録の中で、天才音楽家がいかに身分の壁というものにいらだっていたかを記している。『ネリダ』の別の箇所では「偏見を打ち破って、驚き打ち負かされた上流階級に天才の全能を見せつけよう。天才は、人によって作られたあらゆる差別を打ち消し、貴族階級の高慢な鼻をへしおるのだ」(131-132) と考えるのである。

フランツとの関係が冷却した頃、マリーが非難しあてこすった彼の欠点はまさにここであった。天才は出生による貴族に勝ると言いながら、フランツは爵位をありがたがり、貴族との付き合いを好んでいると。『ネリダ』の終わり近く、ドイツで不遇をかこつゲルマンが酒場で「尊大な貴族のような口調や、お殿様のような調子」(244) で話す場面には、語り手の辛辣な批判がのぞいている。

以上見てきたように、『ネリダ』のゲルマンはヒロインの幼い頃からの知り合いとされ、職業を画家に設定されてはいるものの、その性格のみならず、思想的傾向、野心、コンプレックスなどはほとんどフランツその人であり、当時の読者が単純にゲルマンとフランツを同一化したのも無理ないことであったと言えるかもしれない。それはまた小説としての『ネリダ』の未熟さを表すものでもあろう。出版以来、この作品の文学的価値ではなく、事実との関連のみがとりあげられてきた理由もここにある。

## 2. 2 ベアトリーチェ願望から女性メシア論へ

それでは『ネリダ』の女性登場人物に目を向けてみよう。主人公ネリダにマリーが重ねあわされていることは、名前の由来からしても明らかであり、容姿や社会的な地位などもほとんどそのまま作者自身のそれをなぞっているといえよう。このようなネリダとゲルマンの関わりにおけるキーワードは「ベアトリーチェ」である。これはもちろんダンテの憧れた恋人の名であり、『神曲』で偉大な詩人を天国へと導いていく理想の女性の姿である。『ネリダ』の始めのほうでヒロインが、自分が才能あふれるゲルマンのインスピレーションの源泉であることを知った場面は次のとおりである。

彼女は自分がひとつの運命の審判者であり、魂を導く責をおい、突如ベアトリーチェの性格を持たされているのがわかった。理想を思い描くことのできるすべての女性にとってベアトリーチェになることは夢であった。そして、彼女は自分の魂の奥深くに大きな誇りが生まれるのを感じたのであった。(62-63)

マリーの実生活において、このベアトリーチェになりたいという願望はフランツとの関係でつねに抱き続けたものであり、それは時には一種のマゾヒズムのようなものと結びつくことさえあった。小説中のネリダにもそれははっきりと描かれている。

恋人を過度に崇拜して、こんなに偉大な人は人間の作ったあらゆる掟を超越しているのだと思った。ゲルマンとの外国での閉じこもった生活がこのような賞賛を保持させたのであった。そして、あらゆる犠牲、良心を犠牲にすることでさえ、この愛情に報いるにはまだたりないとまで思うにいたったのであった。(146)

このような盲目的執着は、恋が冷めるにつれて相手にとってわずらわしいものとなるのは当然のなりゆきであろう。天才芸術家を天国へと導くベアトリーチェでありたいという願望はマリーの実生活では無惨な結末を迎えたが、『ネリダ』では最終的にある程度実現されることになる。ネリダ

を捨てたゲルマンは最後には彼女に許され、みとられつつ息をひきとるのである。その部分を見てみよう。

ネリダは次のように信じることができた。少なくとも恋人が死んでいく時には、彼が活着ている間に自分が彼のためになりたかった者であったと。つまり、聞き届けられた祈り、許された罪、開かれた天国を指し示すベアトリーチェであったのだ。(262)

フランツ・リストがマリー・ダグーよりも長生きしたことを知っている後世の読者は、この部分から透かし見える作者マリーの願望を、鬼気迫る女の執念の現れとも、傷ついた自尊心の稚拙な表現とも解説することができるかもしれない。ベアトリーチェになれなかったマリーは作品中でフランツを殺してしまったのである。だが、そのような復讐による一種のカタルシスを経たあと、ネリダの物語は意外な結末へと向かっていくのだが、それにはもちろん十分な伏線と準備がなされている。

ブルターニュで恋人とともに初めて哲学的な本を読んだ彼女の精神には高潔な好奇心が生まれていた。少しずつ大胆になり、若い娘の臆病さを脱ぎ捨てていって、ついには宗教を自由に検討するようになつた。[……] 6ヶ月後にははっきりわかるような変化が現れた。彼女の思想は赤ん坊の状態を脱したのだ。盲目的な信仰は考え抜かれた見解に取って代われ、カトリックのお勤めは、人間の運命に関する宗教的な考え方に代わった。(161)

修道院で受けた教育しかなかったネリダの知的変身の最初の段階がこのように描かれているが、これはもちろんマリー自身との経験とは違ふ。マリーは修道院での教育の他に、評判の高い私塾に通ったり、有能な家庭教師についたりして、当時の若い女性としてはかなりまれな高度な教育を受けており、フランツと知り合った時にはサロンの女主人として必要な程度の教養と知識を身につけていたからである。

小説のほうでは、恋人たちの関係が徐々に冷却していきミラノで一人の

時間を過ごすことが多くなったネリダについて次のように語られる。

ケルヴァン夫人は勉学に打ち込むのがたいそう好きであった。ミラノでの完全に引きこもった暮らしは、瞑想好きの傾向を助長して、女性にはめずらしい堅固で活力のある精神を与えることになった。このような精神は詩的なイマジネーションを持つ人には特にまれなことであったのだが。(170)

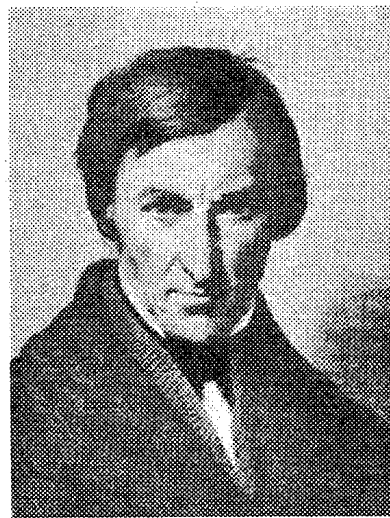
これももちろん作者の実体験をそのまま書き写したものではないが、フランスとの心理的・物理的すれ違いが多くなるのに比例してマリーが哲学や思想の研究に没入していったのは事実である。小説中でネリダはゲルマンとの破局に耐えうる精神的な強さを持つようになり、また、サント・エリザベト元修道院長との再会によってそれまでとは全く違う人生を歩み始めるための知的・思想的な準備がととのっていたのである。

ここで異色の登場人物サント・エリザベト修道女の検討をしなくてはならないであろう。修道院時代のネリダを特に可愛がって指導した高潔な修道院長は、少女ネリダが修道女になりたいと願った時に修道院生活の不毛さを説いてそれを思いとどめさせた人物であった。まもなく彼女自身も修道院を捨てて俗世に戻り、昔自分の家庭教師であったフェレスという男性とともに新しい宗教と理想社会を到来させるために精力的な活動することになるのである。フェレスの描くサント・エリザベト修道女の肖像は次のようなものである。

こちらの労働者階級や貧しい人々や、特に女性たちにたいして彼女はほとんど奇跡のような影響を及ぼしており、その成果はまもなく知られることになるだろう。善行、高い知性そして雄弁によって彼女は絶対的な力を持つようになり、それは彼女の男性的な性格や立派な気質にふさわしいものだ。本当に彼女は偉大な女性であって、歴史にその跡を残すことになるだろう。(200)

この英雄的な女性は、ゲルマンとの破局のあとフランスに帰国して生死の縁をさまよっていたネリダを死から奪い返し、新しい生を与えるのであ

る。マリー・ダグーの研究者たちはサント・エリザベト修道女の中にラムネの面影を見ようとしてきた<sup>11)</sup>。カトリックの論客として輝かしい道を進んでいながら、やがてヴァチカンと対立して破門された聖職者。カトリックの枠をはみ出して、どんどん社会運動家として突き進み、最終的には一種の「民衆教」とでも呼ぶべきものに達したブルターニュの聖者。同時代の人々、特に若者や芸術家らに大きく支持され敬われたラムネの姿が、性を変えて、サント・エリザベト修道女という人物になっていると考えることも可能であろう。ところで、なぜ女性なのか。この変身には、現実のラムネが（カトリックの聖職者にありがちな）女性に対する根本的な不信感を拭うことができなかつたことへのマリーの暗黙の非難が多少なりとも込められているのかもしれない<sup>12)</sup>。上記の引用の前にあるサント・エリザベトの言葉も引いておこう。



図版3 フェリシテ・ド・ラムネ（カラマッタ作）

フェレスは私の空想を助長しました。彼は次のように言いました。真実の精神が男たちから消えてしまう時期がある。そのとき物事についての預言者的能力は女のものとなる。女はしばしばはつきりと完全に理解しないままに、救いの言葉を発することさえあるのだ。フランスをキリスト教国にしたのは、ひとりの女性だった。それを外国のくびきから救ったのは女性だった。あらゆることから考えて、



未来の松明をともしのともまたひとりの女性であろう、と。(219-220)

サント・エリザベトに導かれたネリダは、ゲルマンの死後、「ベアトリーチェ」から社会活動家となる。物語の終盤間際におけるこの驚くべき修道女の再出現と活躍は、作者マリー自身の中のベアトリーチェ願望からの脱却と「女性メシア論」への移行を示すものと考えられるかもしれない。女性メシアへの期待はサン・シモン主義者たちを始めとしてロマン主義時代につねに存在していたものであり、マリーは二月革命の頃にも「女の力」による変革を訴えることになるであろう<sup>13)</sup>。

以上で小説『ネリダ』の検討を終えることにしたい。この小説が執筆された頃、マリーとフランツの関係は断絶していたわけではなく、あいかわらず手紙を交換しあっていた。だが、小説中のゲルマンがネリダにみとられて死に、その後彼女が預言者のような女性に導かれて新しい宗教と社会を築くための活動家となったように、マリーはこの小説を書くことによってフランツとの関係を自分なりに整理し位置づけて、新しい出発をめざしたのである。そして、この作品の不成功によって自分が小説家としての天分に恵まれていないことをさとした彼女は、美術批評家、ジャーナリスト、歴史家としての道を歩んで行くことになった。

## おわりに

『ネリダ』が世に出た2年後の1848年2月、パリで19世紀史のターニング・ポイントとなる二月革命が勃発する。全ヨーロッパを揺るがしたこの市民革命は最初の熱狂のあとの凄惨な六月暴動とその鎮圧をへて12月の総選挙によるルイ・ナポレオン・ボナパルトのフランス初代大統領選出で終結することになる。

革命の始まった2月22日、マリーは下院の審議を傍聴して内閣に対する告発状が読み上げられるのを聞いた。2日後の24日にはルイ・フィリップ王による国民軍（民間人による民兵組織）の最後の閲兵や理工科学校のバリケードを見ている。また、革命臨時政府で起こっていることについての

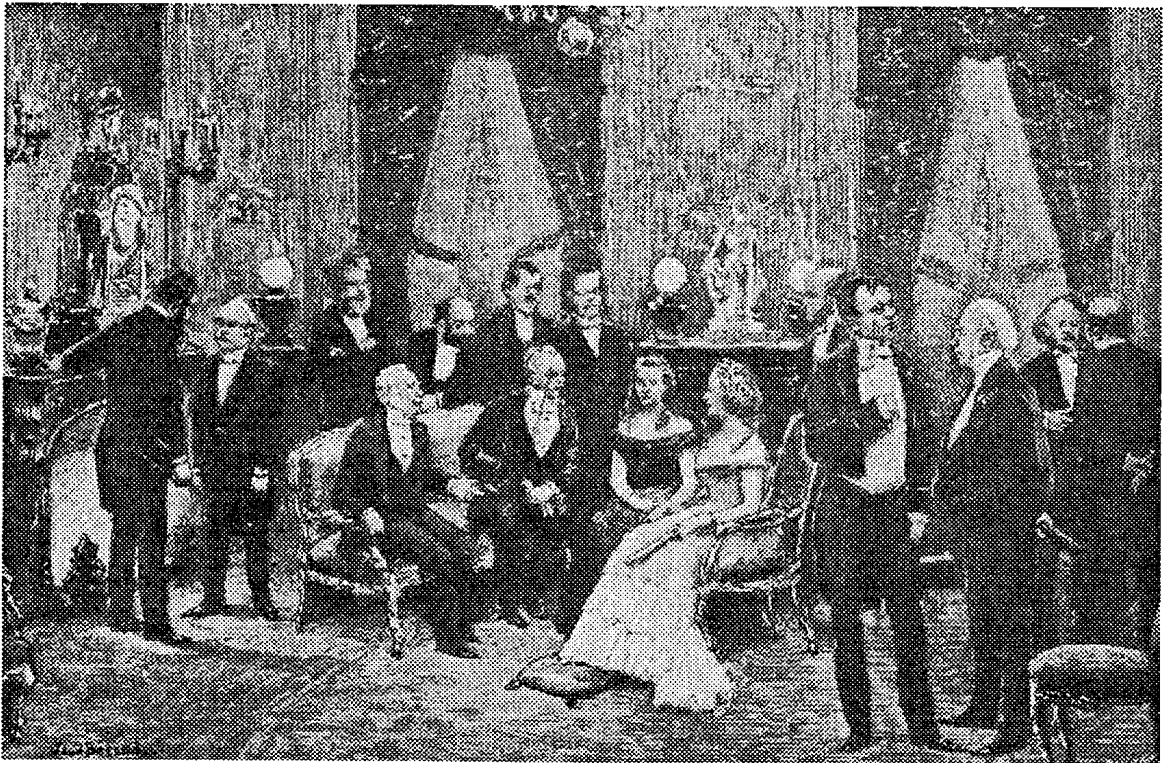
情報を刻一刻マリーはさまざまな人から得たようである。動静が落ち着いた2月26日には町を歩き回って前日までの争乱の跡を見た。その後、彼女は自分の人脈をフルにいかして活発な活動を開始する。何よりもまず当時彼女が心酔していた大詩人で政治家のラマルティーヌのため、自分の開くサロンを彼の政治活動の中心にしようと努力した。多くの政治家、思想家、革命家などが彼女のサロンを訪れた。だが、新しい社会到来へのマリーの期待を裏切って革命は挫折し、1852年12月にはナポレオン3世による第二帝政が始まるのである。

1850年から53年にかけてダニエル・ステルン著『1848年革命史』が発表された。これは革命当時からマリーが収集していた資料、手紙、さまざまな事件の当事者たち（ラマルティーヌや社会主義者ルイ・ブランのような臨時政府閣僚、六月暴動鎮圧に参加した軍人など）の口から得た情報などを総合して書かれた同時代史であり、現代においても二月革命について研究する人々が最も頻繁に参照する文献のひとつになっている。

ところで、ヨーロッパ中を演奏旅行で駆け巡っていたフランツは、ロシアでカロリーネ・フォン・ザイン・ヴィトゲンシュタイン夫人と巡り会い恋に落ちた。フランツのその後の生涯は長きにわたってカロリーネの影響を受けることになる。その一方、マリーとフランツは子どもたちの養育を巡って深刻な対立を起こしながらも、時々手紙を交わしあう関係を続けていた。

1865年4月、年をとるとともに強くカトリシズムに惹かれるようになっていたフランツは剃髪式を受けリスト神父となった。それ以降、公の席では聖職者の衣を着用することとなり、この知らせを聞いたマリーは驚愕した。かつての恋人たちの道はそれほど遠く離れてしまっていたのだ。ふたりの最後の再会は1866年であるが、そこでどのようなやりとりがあったかは良くわかっていない。なごやかな会見ではなかったようで、ふたりはこれ以後二度と会わず、手紙も途絶えてしまった。

1876年、パリのサロンの高名な女主人で文筆家ダニエル・ステルンとして活躍したマリー・ダグーは肺炎のため、その70年の生涯を終えた。フランツ・リストが世を去ったのはその10年後の1886年のことである。



図版4 帝政時代のマリー・ダグーのサロン（ペロー作）

### 【註】

- 1) アンリ・ド・サン・シモンは1825年に死んだ哲学者・経済学者であり、彼の死後、その思想はアンファンタンをはじめとする弟子たちによって受け継がれ、広められていた。
- 2) 以下の内容は次の文献にもとづいている。

*Mémoires, souvenirs et journaux de la comtesse d'Agoult*, présentation et notes de Charles F. DUPECHEZ, *Mercur de France*, 1990, 2vol.

Marie de Flavigny, comtesse d'AGOULT, *Correspondence générale Tome I : 1821-1836*, édition établie, présentée par Charles F. DUPECHEZ, Champion, 2003.

Franz LISZT, Marie d'AGOULT, *Correspondance*, présentée et annotée par Serge GUT et Jacqueline BELLAS, Fayard, 2001.

Charles DUPECHEZ, *Marie d'Agoult*, Perrin, 1989.

Jacques VIER, *La Comtesse d'Agoult et son temps*, Armand Colin, 1955-1963, 6 vol.

なお、拙著『マリー・ダグー』（春風社、2005）も参照。

- 3) この時の様子はサンドの『旅人の手紙』という作品に詳しく書かれている。
- 4) 彼女はのちにリヒャルト・ワーグナー夫人となるであろう。

- 5) 小説のあらすじは次のようなものである。貴族の娘であるネリダと平民の少年ゲルマンは仲のいい幼なじみだった。しかし、やがて別れ別れになり、ネリダは修道院で教育される。宗教生活にひかれるようになった彼女だったが、修道院をあとにし、社交界に出て行かなくてはならない時が来る。そして、財産、美貌、知性を兼ね備えた彼女の前に魅力的なケルヴァン伯爵が現れ、ふたりは婚約する。その時、画家となったゲルマンが再び彼女の前に姿を現す。才能があるにもかかわらず、貴族でないために軽んじられる彼は社会とその慣習に反抗している。優れた芸術家は貴族に勝るとも劣らないと考えるゲルマンはネリダに愛を告白する。心中の激しい葛藤のち、ネリダはすべてを捨てても愛するゲルマンとともに生きようと決心して彼のアトリエを訪れる。だが彼は他の女と同棲していて、それをネリダに隠していたのだった。彼女は自殺を図り、それを通りがかりの労働者に救われる。帰宅後彼女は病気で床に着く。そして病が癒えたとき、彼女はゲルマンへの恋からも癒えた信じ、婚約者ケルヴァン伯爵と結婚する。新婚夫婦はブルターニュ地方のケルヴァン城で18ヶ月の間幸せな時を過ごす。だが、平凡な家庭生活に飽きた夫は浮気をするようになり妻を捨てる。ちょうどその時ゲルマンが城にやってくる。彼はネリダの許しを求め、彼女のそばにとどまる。それからのふたりはともに散策し、読書し、語り合う日々をおくる。彼にとってネリダは靈感を与えてくれるミューズなのだ。このようにして1ヶ月が過ぎたあと、彼女はゲルマンとともに旅に出る決心をし、恋人たちはスイスの自然の中で至福の時を過ごす。しかし、ジュネーヴで暮らすようになるとその幸福にひびが入り始める。才能あるゲルマンは社交界に迎えられるようになるが、婚家を捨てたネリダは家族や友人から見捨てられた身を恥じ、家にこもることが多くなる。ゲルマンは仕事のためしばしば長期間彼女をひとりで残して行く。やがて彼らはイタリアに行くが、そこでの孤独な境遇の中でネリダは徐々に精神力を強め、独立心を持つようになる。いっぽうゲルマンは怠惰になり創作力も衰えてくるが、さる大公の招きによりドイツで仕事をするためネリダを捨ててしまう。フランスに帰国したネリダは、労働者の街リヨンまで来た時、昔いた修道院の院長で、今は俗世に戻ったサント・エリザベト修道女と再会する。元修道院長はここで労働者や貧民たちのために活動していた。ネリダは彼女とともに働く決心をする。ドイツにいるゲルマンのほうは次々と失望にみまわれ、後悔にさいなまれるうちに死病にとりつかれる。そして、彼のもとへ駆けつけて来たネリダに許しをこい和解の中で死んでいく。
- 6) バルザックがサンドから聞いた話をもとに創作した小説。マリー、フランス、サンドの関係がモデルとなっている。

- 7) この小説はサンドとショパンの関係を下敷きにしたものと考えられていた。
- 8) Daniel Stern, *Nélida*, Calmann-Lévy, 1987, p.57. 以下『ネリダ』からの引用は本文中にページ数のみを記す。
- 9) 著者名なし。 *Aux artiste. Du passé et de l'avenir des beaux arts (Doctrine de Saint-Simon.)*, Mesnier, 1830, pp.73-74.
- 10) *Ibid.*, p.84.
- 11) Daniel Stern, *Nélida*, Calmann-Lévy, p.272のDupêchezによる注を参照のこと。
- 12) 女性に関する問題についての意見の相違で、サンドもラムネから離れることになったのである。
- 13) 以下参照のこと。坂本千代『マリー・ダグー』137-142ページ。